

- 一九九四年
- 61 『日本女性人名辞典』、日本図書センター、一九九三年、一〇〇二頁
- 62 榎村寛之、『伊勢斎宮の歴史と文化』、塙書房、二〇〇九年、一二三頁
- 63 前掲注62、六六頁
- 64 前掲注62、一一六頁
- 65 前掲注6、二六六頁
- 66 大塚信一、『拾遺和歌集新日本古典文学大系7』、岩波書店、一九九〇年
- 67 同上
- 68 前掲注62、一〇九頁
- 69 前掲注6、二六五頁
- 70 前掲注62、一五六頁
- 71 前掲注6、三一一頁
- 72 同上
- 73 前掲注6、三〇二頁
- 74 同上
- 75 前掲注6、一二三頁

## 伊勢斎宮の役割と内面に関する考察

- と〈性〉のはざままで」、人文書院、一九九六年
- 6 所京子、『斎王和歌文学の史的研究』、国書刊行会、一九九二年
- 7 所京子、『斎王の歴史と文学』、国書刊行会、二〇〇〇年
- 8 虎尾俊哉、『延喜式・上』、集英社、二〇〇〇年
- 9 前掲注1、八三四頁
- 10 同上
- 11 同上
- 12 前掲注1、二五八頁
- 13 前掲注1、八三八頁
- 14 同上
- 15 同上
- 16 前掲注1、八四一〜八四二頁
- 17 同上
- 18 前掲注1、八四四頁
- 19 前掲注1、八四五頁
- 20 前掲注1、八五四〜八五五頁
- 21 前掲注1、八五六頁
- 22 前掲注1、八五七頁
- 23 前掲注1
- 24 前掲注1、二九一頁
- 25 <http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html> 早稲田大学図書館、古典籍総合データベース、「類聚雜要抄巻第一〜四」
- 26 『国史大辞典第十三巻』、吉川弘文館、一九九二年、八四〇頁
- 27 前掲注2、一〇一頁
- 28 同上
- 29 同上
- 30 前掲注2、一〇五頁
- 31 前掲注2、一四九頁
- 32 前掲注2、一〇〇頁
- 33 前掲注2、一二四頁
- 34 前掲注2、一五一頁
- 35 前掲注2、一一六頁
- 36 前掲注4、八六頁
- 37 同上
- 38 同上
- 39 同上
- 40 『国史大辞典第六巻』、吉川弘文館、一九八五年、五五九頁
- 41 前掲注4、七三頁
- 42 同上
- 43 同上
- 44 同上
- 45 前掲注1
- 46 前掲注1、八三九頁
- 47 <http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html> 早稲田大学図書館、古典籍総合データベース、「北山抄六」
- 48 岩坪健、『新典社新書五七ウラ日本文学古典文学の舞台裏』、新典社、二〇一一年、三二頁
- 49 同上
- 50 前掲注6
- 51 前掲注7
- 52 前掲注6、六頁
- 53 同上
- 54 角田文衛監修、『平安時代史事典・下』、角川書店、一九九四年、二三四八頁
- 55 『国史大辞典第十二巻』、吉川弘文館、一九九二年、一八一頁
- 56 川村裕子、『王朝の恋の手紙たち』、角川学芸出版、二〇〇九年、一〇五頁
- 57 同上
- 58 松本真奈美、「雅子内親王と敦忠、師輔の恋」、《王朝の歌人たちを考える―交遊の空間》、武蔵野書院、二〇一三年、二八頁
- 59 前掲注58、三四頁
- 60 角田文衛監修、『平安時代史事典 資料・索引編』、角川書店、

対し、自分なりの強い責任感を持つている者もいた。「齋宮」というと、内親王や女王が無理にその役目を押し付けられて、島流しにされるように伊勢へと送られて、齋宮自身も鬱々としてるように想像するかもしれないが、必ずしもそうではなかったのである。「齋宮」という役目に対して辛い、悲しいといった負の感情だけを抱いていたのではなく、自分が齋宮として務めることで薄れていく天皇の権勢を取り戻すために天照大神の後ろ盾を得ようとしていたのである。

一般的には齋宮という存在を知らない人もいるだろう。しかし、彼女達が残した和歌が、齋宮としての役割を務めながら、一人の女性として存在していたという証拠となるのではないだろうか。

## おわりに

齋宮の和歌を読み解いていく前までは、齋宮とはとても可哀想な存在だと信じ切っていた。彼女達は無理やり齋宮へと仕立て上げられて、伊勢へと追いやられたのだと思っていたからだ。それはやはり、第二章でとりあげた先行研究にもあげたように、齋宮は伊勢神宮の天照大神の神威を天皇へと媒体するという役目を担うために、伊勢に滞在しなければならぬからである。また、齋宮とは聖なる身でなければならぬため、俗世と離れ、恋をすることも叶わず、日常では常に精進潔齋の日々を送っていると思っていた。彼女達は、皇女という身分であるにも関わらず、齋宮に選ばれたために悲運な人生を送ったのだと決め付けてしまっていたのだ。しかし、全ての齋宮達がそうとは限らないことを『延喜式』を読み深め、和歌の内容を理解していくことで、必ずしもそうではないのだと見つけることが出来たと思う。

確かに本人の意思とは関係なく、政治的な役割を担うために、彼女たちは伊勢の齋宮に選ばれたのかもしれない。だが、それでも自分が齋宮となることで、父である天皇の政治を助けたいという願いを和歌に詠み込む者もいた。齋宮が伊勢に行つて、会えないことが寂しいと和歌を詠む親しい者もいた。彼女達が伊勢へと下ることで心を痛めるだけではな

く、祝辞をくれる者もいた。かならずしも天皇が心をかけていない者が齋宮として伊勢へと赴いたというわけではなかったのである。齋宮という存在の特殊性から彼女達が表に出る事はないが、彼女たちの思いを和歌から読み取ることが出来る。彼女達が詠んだ和歌には、伊勢で寂しい思いを詠っているものもあつたが、そこでも決して齋宮となつたその身を悲観しているわけではなかった。齋宮達が伊勢で過ごす日常は宮中の日常とそれほど大差ないものであつた。都からの使者が頻繁に訪れていたことから、都と伊勢とのやりとりが常に行われていたことが分かる。普段、食べているものも海と山が近いことから新鮮な種類が豊富な食事を摂っており、必ずしも精進料理ばかりではないことも延喜式から読み取れた。行事に含まれてはいないが、歌合や貝合も行われていた。決して「精進潔齋」による苦を強いられるような生活ではなかったのであり、案外豊かな日常を過ごしていたのかもしれない。

彼女たちが齋宮となつていなければ、当然、第三章でとりあげた和歌は生まれることはなく、現代まで残されることはなかったことになる。齋宮達が詠んだ和歌に心を惹かれたものがあり、その歌が和歌集に選ばれて残つたことで、現代まで伝わつたのだ。齋宮にとつての和歌は、相手に気持ちを伝える手段だけではなく、歌合のように楽しむものでもあり、自分がその和歌を詠んだ証でもある。他でもなく彼女達自身が残した和歌こそが、齋宮として彼女達が存在した意味を教えてください、この研究をしていて深く感じられた。

## 〈注〉

- 1 虎尾俊哉編、『延喜式・上』、集英社、二〇〇〇年
- 2 義江明子、『日本古代の祭祀と女性』、『物忌童女と〈母親〉』、吉川弘文館、一九九六年
- 3 前掲注2、一六五頁
- 4 義江明子、『古代女性史への招待〈妹の力〉を超えて』、『歴史学における〈妹の力〉』、吉川弘文館、一九九八年
- 5 田中貴子、『聖なる女―齋宮・女神・中将姫』、『齋宮の変貌―〈聖

一首目は、「とこなつ」は撫子の花を指す季語であるため、夏に詠まれた歌だということが分かる。「あだし野」とは現在の京都市右京区にあり、平安時代には火葬場や墓地であったことから、無常を詠むときに使われる言葉である。根が「音」という言葉から、「泣く」ことを意味しており、「露」を意味するので、伊勢の土地で味わう寂しさに対し涙を流している、という意味にとれる。二首目は「月影」が秋の季語であることから、秋に詠まれたもので、「雲」は手が届かないほど遠くにあることから宮中のことを指していると思われることから、都から遠く離れた地で物思いに耽るほどの寂しさを詠っているものだろう。次の一首は奨子内親王（一二八六～一三四八年）の和歌である。

延慶元年八月、野宮より出で給ふとて

鈴鹿河八十瀬の波はわけもせで 渡らぬ袖のぬるる頃かな

〔玉葉和歌集〕巻第十五雑歌二

（歌意）鈴鹿河のたくさんの瀬の波を分けて伊勢へといくこともなく、河を渡ることができない袖が濡れてしまうこの頃よ

（意訳：井上）

この歌は伊勢へと旅立つ直前だった延慶元年の八月二十五日に後二条天皇が崩御する事態が起こったことで、奨子内親王が野宮から退下しなければならなかった際に詠んだものである。<sup>(71)</sup>「袖」はつまり自分を指しており、鈴鹿河を渡ることが出来ず、その虚しさや残念さを袖を涙で濡らしてしまったことを嘆いている。<sup>(72)</sup>次の和歌は土御門天皇朝の（奨子内親王（一一九六～薨年不詳）の和歌である。

伊勢におはしましける時、をみなへしを植ゑられたりけるに、京へ  
帰りのほりたまふとて

植え置きて花の宮こへ帰りなほ 恋しかるべき女郎花かな

〔新統古今和歌集〕巻第九離別歌

（歌意）恋しい都へと帰るけれど、植えたまま置いて帰る女郎花も恋しく思う事よ

（奨子内親王は後鳥羽天皇の第三皇女として建久七年（一一九六）に生まれ、四歳の時に齋宮として卜定された。野宮で潔斎生活を終えてから、土御門朝の際に六歳で伊勢へと下向した。しかし、十年後の承元四年（一二一〇）に土御門帝が崩御したことで退下することとなったのである。<sup>(73)</sup>この際、十六歳となった奨子内親王がこの和歌を詠んでおり、帰京できることは嬉しいが、伊勢の地に残していく女郎花に対して愛着を詠ったものである。<sup>(74)</sup>都から遠いと言っても、何年か過ごしたことで慣れた伊勢の地を離れる事は、喜びだけでなく寂しさも感じていた事が読み取れる。

次に後醍醐天皇朝の（奨子内親王（生没年不詳）の和歌である。

野宮に久しく侍りける此、夢のつげありて大神宮へ百首歌よみて奉りける中に

いすず川たのむ心はにごらぬを などわたるせの猶よどむらん

（歌意）五十鈴川を渡ることを頼みにしている私の心は濁っていないというのに、どうして渡る瀬はそれでも淀んでいるのだろうか

（意訳：井上）

最後の齋宮とされる（奨子内親王は、自分が齋宮となり、伊勢神宮で奉仕をすることで、父である後醍醐天皇が望む政治を実現させることができると考えていた。）（奨子内親王は天照大神の御杖代になるために長い間、野宮で潔斎生活をしながら群行の日まで待機していたが、乱世と財政の問題により、群行が果たされずに退下を余儀なくされたのである。「五十鈴川に頼む」ということは、天照大神の威光を頼りにすることを意味し、川の「瀬」と世の中の「世」をかけることで、「なぜ五十鈴川の水は濁っていないのに、この世はこんなにも淀んでいるのである」と伊勢に行くことが出来ないもどかしさと、乱世を生きる皇女として、齋宮となるための強い覚悟が伺える和歌を詠っている。<sup>(75)</sup>

都から離れている伊勢の土地で過ごすことで、寂しさを覚える者もいれば、愛着を詠う者もいる。そして、和歌に残すほど齋宮という役目に

別れゆくほどはくもゐをへだつとも 思う心は霧にもさはらじ

資子内親王（『齋宮女御集』）

（歌意）遠くに離れ、別れたとしても、あなた方を思う私の心は、霧などに妨げられませんよ

（意訳：井上）

資子内親王は円融天皇と選子内親王の同母姉で、異母姉である規子内親王と徽子内親王に対して、伊勢へ下ることを慰めるだけではなく、元氣付けている。規子内親王母子と資子内親王とは多くの和歌のやりとりが残っており、異母姉妹だが仲が親しかった事が窺える。次の和歌は、規子内親王が群行する際に賀茂齋院として選ばれていた選子内親王が送った歌である。

くだりたまへるころ、かの宮より

秋霧の立ちて行くらむ露けさに 心をそへて思ひやるかな

選子内親王（『続古今和歌集』巻第九離別歌）

（歌意）秋霧が立つ露の季節に伊勢へと行くのは、涙も多いでしょうが、私も心を寄せるようにあなたを思っています

（意訳：井上）

選子内親王は異母姉である規子内親王に対して、離れることとなり、悲しく思うが、それでも心は規子内親王を思っている、と詠っている。規子内親王が齋宮として選ばれたのは円融天皇朝で、円融天皇の異母姉であった。規子内親王と円融天皇の間で和歌のやりとりを見ることはできないが、円融天皇と同母の姉・妹とは和歌が残されており、親密なやりとりが見られる。また、円融天皇の皇后である藤原嬪（てんご）との文のやりとりが為されていたことも確認できる。これらの事実から、天皇と直接関わりがなくとも天皇の近親者と親密な関係を築いていたことが窺える。それにもかかわらず、齋宮に選ばれていることから、必ずしも寵愛の薄い人物が齋宮に選ばれたとは考えづらいのではないだろうか。

### 第三節 和歌から齋宮の心情を探る

この節では齋宮自身が詠んだ和歌から、彼女たちの心情について考察していきたいと思う。齋宮という役目を受けた内親王や女王は、史料上だと六十人余りである。そこには、実在の確認出来ない齋宮や誤伝とされる齋宮もあり、はっきりとはしていないため、そこを省けば六十四人の齋宮が史料上に残っていることが確認できる。この齋宮の役目を担った彼女たちは一人ひとりが個人であるため、勿論どのような気持ちで齋宮の役目を全うしていたのかはそれぞれである。そのため、齋宮を担った者が絶対にこの気持ちである、ということはないことを前以て触れておきたい。

ここでは、四人の齋宮が残した和歌を例として挙げていき、それぞれがどう感じていたのかについて心情とその和歌が詠まれた背景を読み取りつつ考察していきたい。まず初めに、次の二首は第二節でも、とりあげた規子内親王（九四九〜九八六年）の和歌を見ていきたい。以下の二首は規子内親王が齋宮として伊勢の地にいる際に詠んだものである。

みや

あだし野のくさもねながらあるものを とこなつにのみ露の置くら

む

（『さいくうの女御』西本願寺蔵「三十六人集」及び小島切）

（歌意）寂しいあだし野の草にも根があるけれども、撫子の花にだけ露が降っているのだろう

（意訳：井上）

なにの折にかありけむ、宮の御

あまつ空くもへだてたる月影の おぼろげにものおもふわがみを

（『さいくうの女御』西本願寺蔵「三十六人集」）

（歌意）月明かりを隔てる雲ははるか遠く、物思いにふける私は並み一通りではないことよ

（意訳：井上）

この二首は伊勢に旅立つ幼い楽子内親王に向けて詠んだもので、齋宮となった自分の娘の身を案じる父親としての心情を吐露したものである。別れが悲しくも齋宮が長期務めることは自分の在位期間が長い事を表しているため、複雑な心境だったのではないだろうか。

一方で順徳天皇（在位一二一〇～一二二二）は異母姉妹が齋宮に選ばれた際、次のような歌を詠んでいる。

齋宮群行事思ひいでて

行末も照すひかりの長月に つげのをぐしはさはなれにき

順徳天皇御製 『紫禁和歌草』一〇三（四）

（歌意）伊勢へと離れてしまったが、額髪に黄楊の御櫛を挿したあなたが、これから先の私の御代に光を長く照らしてくれるだろう  
（意訳：井上）

このように齋宮としての役割に期待している内容の和歌もあることから、齋宮の役割を重要視していたことが読み取れる。また、和歌のやりとりはしていないが、天皇に寵愛を受けていた齋宮の例として以下の齋宮を挙げていく。第二章でもとりあげた三条天皇朝（在位一〇一一～一〇一六）の当子内親王は父である三条天皇から深い寵愛を受けていた。だが、発遣の儀で別れの御櫛を額髪に挿して「京の方に赴き給ふな」という言葉をかけなければならぬが、この際に三条天皇は別れがたくなつたのか、当子内親王を自分の方へと振り返らせている。本来振り返ることは禁じられているが、その禁を破るほど当子内親王に愛情を向けていた事が分かる。<sup>(68)</sup>

また、白河天皇朝（在位一〇七三～一〇八七）媍子内親王は白河天皇の最愛の第一皇女で容姿は大変美しく性質も寛仁で、天下の盛権はこの人にとまで言われており、その寵愛ぶりは『栄花物語』にも書かれているほどである。<sup>(69)</sup> これらの事例から、単純に寵愛が薄い者を齋宮として送るのではなく、寵愛が深い皇女をあえて伊勢へと送る場合もあることがわかった。その理由としては伊勢神宮と天皇家の結びつきをより強固なものにするためと考えられる。第二章でもとりあげた例として、

三条天皇が即位した当時は藤原道長が権勢を振るっていた時期であるため、寵愛の深かった当子内親王を齋宮として伊勢へと送ることで、天皇家の権威を取り戻そうとしていたと推測する。

次に齋宮と親交のあった者達が詠んだ歌を取り上げていくが、なぜ伊勢と都という遠地で文のやり取りが頻繁に行われていたのかについて、榎村寛之氏は次のように論じている。京から伊勢への日程は日記や実際の記録からは早くて二日ほどで、十世紀後半には齋宮の館と京との書簡の往還は勅使や都に普段は住んでいた伊勢神宮の祭主などの、かなり頻繁に伊勢を訪れる都人に託される事が多かったという。<sup>(70)</sup> 都にいる齋宮と親しい者達は伊勢に用のある都人達に文を託していたことから、都から伊勢へと送られた文が数多く残っていたのである。文の内容としてはやはり、伊勢という遠い場所へ行くことになった齋宮を気遣い、元氣付けているものがある。次の三首は齋宮に選ばれた規子内親王に対して詠まれた和歌である。

山ざとの心ちするおほむすまゐに、きさいの宮の久しうおとづれ聞  
こえ給ざりければ、春、齋宮

雲井とぶ雁のねちかき山里も なほたまづさはかたくぞありけ  
る

きさいの宮（『さいくうの女御』）  
（歌意）遠く離れた空のかなたを飛んでいる雁の鳴き声は山里でも近くに聞こえているのに、それでも手紙はめつたに來ないのだなあ  
（意訳：井上）

規子内親王が齋宮として選ばれた際に母であり、「齋宮女御」である媍子皇女は一緒に伊勢へと下っている。その際に母子と親しい「きさいの宮」と呼ばれている円融天皇の皇后、藤原皇子から久しく便りがなかったのだと、詠っているものである。次の和歌は異母妹である資子内親王が規子内親王に対して詠んだ和歌である。

一品宮より、伊勢の御下りに

した際にはまだ九、十歳程の年齢だったために、娘がいなかった。当時  
は幼帝の即位が続く事があり、それには以下のような要因があげられる。  
天皇家が次第に確立したことで、個人の資質よりも血統が重要視される  
ようになり、政治が安定してくると儀式さえこなせる程度の年齢であれ  
ば、天皇は子どもでも務まり、個人の自覚が強まると息子に位を譲って  
上皇となり、自由な立場から天皇を後見するという選択肢が望まれてい  
たからである。<sup>(62)</sup>しかも、天皇に清浄性が強く求められるようになった  
ことから、世俗の染みない幼児の方が天皇にふさわしいという意識が生  
じていたため、天皇が即位すればその娘を齋宮にするという慣習はやが  
て、清和天皇の異母姉である括子内親王が齋宮と選ばれたことで、破ら  
れることとなる。<sup>(63)</sup>その後は齋宮を選ぶ際にはまず天皇と同世代の内親  
王がその候補となるようになり、さらに娘か姪、次世代へと移行してい  
く傾向になる。<sup>(64)</sup>

即位した朱雀天皇が幼いため、先代の醍醐天皇の子から齋宮は選ばれ  
るが、雅子内親王と同母の姉妹では勤子内親王と都子内親王（都子内親  
王）、源兼子がいる。雅子内親王が齋宮として選ばれた際、五つ程年上  
の勤子内親王はすでに二十八歳くらいである。だが、延長八年（九三〇）  
頃にはすでに藤原師輔と結婚しており、齋宮の候補の対象にはならな  
かったと考えられる。源兼子は延喜二年十二月二十八日に源朝臣を賜り、  
臣籍に下ったことから、こちらも対象とはならなかったのではないだろ  
うか。

また、異母姉妹の内親王たちの中で、雅子内親王の他に齋院を外して  
齋宮となる可能性があったものは、普子内親王と康子内親王の二人だけ  
である。但し、雅子内親王から英子内親王の間の齋宮として、「齋宮女御」  
の呼び名で有名な徽子女王が承平六年（九三六）九月十二日に選ばれて  
いる。彼女は雅子内親王の異母兄である重明親王の娘であり、後の村  
上天皇に入内している。これらのことから、雅子内親王が齋宮として選  
ばれた事は、必ずしも政治的だと確信出来る部分はなく、卜定によって  
順当に選ばれたのではないだろうかと思う。また、身分が関係する可能性  
としての考察だが、雅子内親王の母が従四位下の更衣だったが、彼女の  
異母姉妹には中宮や正三位、正五位下の女御、従四位上の更衣といった

母周子よりも身分が上だった母を持つていたことから、母の身分よりも  
やはり天皇の血筋を優先していたのではないだろうかと考察できる。

## 第二節 齋宮周辺の和歌からみる寵愛とその重要性

従来の説では、齋宮は皇女や女王のなかで寵愛が薄い者が選ばれると  
された過去の研究が存在すると所京子氏が指摘している。<sup>(65)</sup>しかし、和  
歌について分析を進める中で、むしろ寵愛が深かった者が齋宮として伊  
勢へ送られたのではないかと考えた。齋宮は実際に天皇や周辺から寵愛  
を受けていたのかを知るため、齋宮に関係する者の和歌を取り上げた上  
で、天皇の寵愛が深い者が齋宮とされた理由について考察したい。

まず、天皇と齋宮との関係に着目したい。齋宮はその性質上、天皇の  
即位と同時に卜定され選ばれることとなる。次の二つの和歌は村上天皇  
朝（在位九四六〜九六七）の楽子内親王が齋宮に選ばれて、伊勢へと向  
かう群行の際に父である村上天皇が楽子内親王に宛てて詠ったものであ  
る。

天曆十一年九月十五日、齋宮下り侍りけるに、内より硯てうじてた  
まはずとて  
思ふ事なるといふなる鈴鹿山 越えてうれしき境とぞぞく

（歌意）齋宮がいるのは、国家安泰の基であるから、天皇の私の思う  
ことが成就するという鈴鹿山は、越えるのが喜ばしい国境の山と聞く  
ことだ<sup>(66)</sup>

天曆の御時、九月十五日齋宮下り侍りけるに

君が世を長月とだに思はずば いかにも別のかなしからまし

御製（『拾遺和歌集』第六別）

（歌意）この長月にあやかっつて、せめて貴女の御代が長久であること  
だけでも思つて、心慰めることがなかったならば、どれほど別れがつ  
らいことだろうか<sup>(67)</sup>

にお互いに送った和歌である。

西四条の齋宮のもとに、花つけて遣しける

匂薄く咲ける花をも君が為 折りとしをれば色まさりけり

権中納言敦忠 『玉葉和歌集』巻第十二、恋歌四

(歌意) 匂いが薄く咲いている花をあなたのために折ったなら、あなたを思う気持ちも大きくなることよ (あなたと一緒に居るならば)

(意訳：井上)

返し

折らざりし時より匂ふ花なれば わが為深き色とやは見る

雅子内親王 『玉葉和歌集』巻第十二、恋歌四

(歌意) 折りとつてない時から匂う花ならば、私のためにどうして深い色に見えるのだろうか (居ない時からあなたを思うのなら、どうしてこんなにあなたを思う気持ちが強いのだろうか)

(意訳：井上)

しかし、和歌の背景を読み取っていくうちに疑問が二つ浮かび上がってくる。まず一つ目として、雅子内親王と敦忠の関係はなぜ、不祥事として扱われなかったのか、ということである。雅子内親王と敦忠は伊勢へと下る前に直接会った、ということはないが、伊勢へ下る前からお互いに文の遣り取りをしている。そしてやり取りは、齋宮として伊勢へ下ったあととも続いていた。それにも関わらず、なぜ不祥事扱いされなかったのだろうか。

まず、なぜ伊勢という遠地と都の間で、齋宮という役割に身を置いていたにも関わらず、文のやり取りが出来たかという点、そこには齋宮の母である源周子が関係していた。周子も雅子内親王の齋宮卜定後に敦忠と交わした贈答歌があることから、二人の仲がある程度まで知っていたことが伺える。<sup>59)</sup> また、それだけではなく、雅子内親王の女房や敦忠の従者などが二人の仲を見守りながらも、外部に対してはあからさまには伝わらぬように双方で最大限に努力していたことも関係している。その上で、なぜ不祥事扱いにはされなかったのかを改めて考える。

当時、詠まれた和歌の史料から宮中で名の知れている歌人などと呼んで、歌合せがよく行われていたことが分かる。そこには、男性の歌人も参加しており、歌合せでは季節の歌だけでなく、齋宮に選ばれたことへの祝いの歌などが詠まれている。そして、齋宮自身が近親者である異性(天皇である父や叔父、兄弟)と文の遣り取りすることはあったと思われる。第二節でそのことに触れるが、齋宮は実際に父天皇から和歌を貰っている者もいる。つまり、文の遣り取りならば異性と関わる事が可能だったのではないだろうかと推測する。また、祭事の際には男性の神官や官人が取り仕切るため、その際にも男性と関わる事はあると思われる。

これらの事を踏まえて考察すると、男性との直接的な接触以外は不祥事として扱われないのではないだろうかと考えられる。もちろん、雅子内親王と敦忠の和歌のやり取りには、必ず仲介者が存在するので、直接お互いに言葉を交わすこともない。雅子内親王が敦忠との関係が露見していたとしても、結婚していなかったことで間接的な接触として扱われ、齋宮に選ばれる候補として入ったのかもしれないのではないだろうか。

二つ目になぜ、雅子内親王が齋宮に選ばれたのかについてである。醍醐天皇には四十人を超える子女がおり、『平安時代史事典』<sup>60)</sup>に記載されている皇女だけでも十七人の娘がいる。その中で、なぜ敦忠との関係が世間に露見していた雅子内親王が齋宮として選ばれたのだろうか。先程述べたように、男性と接触しておらず、結婚していないことが齋宮の候補として入ったのだと推測する上で、母方の血筋や当時を取り巻く状況を挙げて考察したいと思う。雅子内親王の母は源周子(生年不詳、承平五年)であり、彼女は嵯峨源氏初代源定の子であり、右大弁であった源唱の娘である。<sup>61)</sup> 当時、醍醐天皇に入内していた者は記録されているだけで十九人おり、しかも彼女よりも高貴な血筋出身の後妃は他にもいる。だが、周子は醍醐天皇との子を七人ももうけており、醍醐天皇とやり取りした和歌が残っていることから、天皇の寵愛が深かったのではないだろうか。

次に、雅子内親王が齋宮に選ばれた朱雀天皇朝の承平元年(九三二)の十二月二十五日の際に、醍醐天皇の娘だった他の内親王たちの中に他の齋宮候補者はいたのか挙げていきたい。まず、朱雀天皇が天皇に即位



齋宮と齋院の和歌を自ら勅撰集・私撰集・私家集から齋王に關係する和歌を集めて集成しており、その集成したものが『齋王和歌文学の史的研究』である。所京子氏は著書の中で、伊勢齋宮と賀茂齋院の両者を対比しながら特色を研究する上で、両者の共通点と相違点はそこに奉仕する齋王自身および、關係者たちの心構えや日常生活を大きく左右したことで、伊勢齋宮と賀茂齋院の両者の特色が浮かんでくると述べている。<sup>(52)</sup> 齋宮および關係者の実態は、公家日記や歴史物語などに登場する一部の著名人を除けば、従来はほとんど不明とされてきたが、集成した和歌を検討することにより、かなり多くの齋王の公私にわたる生活の断面や齋王と血縁・交流の深い人物の動静を明らかにする事が出来たと述べている。<sup>(53)</sup> 本章では、所京子氏の著書から大きく影響を受け、更に踏み込んだ研究をしたいと思ひ、和歌から齋宮の内面を探るだけではなく、背景から生じた疑問についても論じていきたい。

まず、第一節では平安時代、醍醐天皇の娘であった「雅子内親王」と恋仲であった「藤原敦忠」の和歌のやり取りを見ていこうと思ふ。最初に二人がどのような人物か挙げていきたい。雅子内親王は醍醐天皇の娘で、母は源周子である。延喜九年（九〇九）に生まれ、九三二年に齋宮に選ばれており、退下後に右大臣藤原師輔と結婚している。<sup>(54)</sup> 恋仲であった藤原敦忠は延喜六年（九〇六）生まれ、時の権力者であった藤原時平の三男で顕忠の弟である。平安時代中期の公卿で有名な歌人でもあり、三十六歌仙の一人に選ばれている。雅子内親王の他にも源等の娘・御匣殿別当藤原明子・大輔・越後の藏人などの女房との間にも恋歌のやり取りがあったが、その中でも雅子内親王とやり取りした膨大な和歌が残っている。<sup>(55)</sup>

補足として、恋愛における和歌は、アプローチされた女性が男性に対して本心に拒絶の意思があった場合は全く返事を出さず、仮に返歌を出す場合はその女性の女房などが代筆をしていた。<sup>(56)</sup> そのため、直筆であった場合は女性が相手の男性に対して心を許すようになったというところで、關係が進展しているといえるのである。<sup>(57)</sup> それを踏まえて、二人には膨大な量の和歌のやり取りが残っていることから、建前だけのやり取りの關係ではなかったのではないだろうかと考えられる。

また、二人の関わりは、雅子内親王が齋宮卜定された承平元年（九三二）十二月以前の少なくとも二度の秋を経験していることから、延長八年（九三〇）秋以前には二人のやり取りは始まっていると松本真奈美氏は述べている。<sup>(58)</sup> 以下の二首は当時、恋仲であった雅子内親王（朱雀天皇朝）が齋宮に決まった際に敦忠が詠んだ歌である。

西四条の前齋宮まだみこにのしたまひし時、心ざしありて思ふ事  
侍りける間に、齋宮に定まりたまひにければ、其あくるあしたに、  
柿の枝につけさしおかせ侍りける

伊勢の海の千尋の濱に拾ふとも 今は何てふかひが有べき

敦忠朝臣（『後撰和歌集』第十三 恋歌五）

（歌意）伊勢の海まで行って広い浜で貝を拾ったとしても、今となつては、どのような貝があるでしょうか。伊勢の齋宮になられた今は、どのように求めても、何のかいもなく、空しいことです

（意識：『後撰和歌集 新日本古典文学大系6』）

伊勢の海に舟を流してしほたるる 蟹をわが身となりぬべきかな

敦忠朝臣（『あつたゞ』西本願寺蔵「三十六人集」）

（歌意）しずくを垂らしながら舟を流している蟹のように自分になつてしまふに違いないのだなあ

（意識：井上） ※蟹：魚介をとる人。漁師・海人のこと。

伊勢の海の蟹のあまたになりぬらむ われも劣らずしほを垂るれば

雅子内親王（『あつたゞ』西本願寺蔵「三十六人集」）

（歌意）きつと蟹になつてしまふに違いない。自分もあなたに劣らないほど潮（涙）が流れているので

（意識：井上）

この二首から、雅子内親王が齋宮に選ばれた事で、別れによりお互い涙を流している事が読み取れる。次に雅子内親王が伊勢へと下ったあと

この節では一節と二節で論じたことを交えつつ、「齋宮」という存在についてさらに深めて論じていきたい。第一章でとりあげた平安時代の法令集である『延喜式・上』<sup>(45)</sup>には「齋宮」に関する項目があり、卜定から群行、野宮と初齋院に関する祭祀、年間行事、調度品、齋宮寮の官人の月料、祭祀における祓料、祭祀に使われる料物の数、忌詞、食法、衣服に関する事細かい条文が書かれている。それは別項目の「齋院」よりも多いことから、いかに齋宮が重要視されていたことが分かる。齋宮制度が始まったのは史料上では飛鳥時代の大来皇女からその歴史は南北朝の祥子内親王まで続き、その歴史の長さは六百年以上に及ぶ。だが、それにも関わらず、なぜ歴史を学ぶ際には齋宮はとりあげられないのだろうか。

それはやはり「齋宮」という役目の特殊性にあると思われる。卜定で選ばれた天皇の娘、もしくは天皇の血筋の者が三年間もその身を潔斎してから伊勢神宮へと向かい、その役目を終える時まで都へと帰って来ることは出来ず、伊勢神宮で「奉仕」しなければならぬという役目には、疑問を抱きかねないからだ。第二節で述べたように齋宮制度が天皇の威光を示すためにあるのであれば、「齋宮」の存在は宗教的と言うよりも、政治的な役割だったと言える。平安時代といえ、表に出てくるのは摂関政治である。第二節でとりあげた三条天皇が天皇としての力を取り戻すために、自身の娘である当子内親王を伊勢へと送ったように、当時は政治を行う権力が天皇ではなく関白や摂政に移っていたからこそ、齋宮の役割に期待をしたのかもしれない。

皇族の未婚の女性で齋宮になるための条件を満たしていれば、「齋宮」という役目を担うことが出来たが、確かに選ばれる際に卜定によって齋宮が決まることもあり、政治的判断から卜定の結果が最初から決まっている場合も事実としてあったのは、やはり摂関政治が行われていたことも関係しているだろう。「小右記」には「明日齋宮於彼宮可立給」という記事がある。齋宮が卜定で決まるとその該当の齋王家に勅使が伝えに行くが、該当の齋王家では卜定前日に勅使を迎えるため雑物の移動を行っているなど準備をしているという。つまり実際には齋宮は、卜定以前に決まっていることになる。<sup>(46)</sup>また、雅子内親王が齋宮として選ばれた際には、

「北山抄」の六巻に「卜定齋王事」の項目に「先令ト伊勢齋王、大臣開見、両度不合、三度合之」と「合」が出るまで三回占われたという記事が載っており、事前に齋宮に決められていた者に「合」と出るまで数度卜定されていた事例もあったことが分かる。<sup>(47)</sup>

これらのことから、齋宮となる者は卜定する前から決まっていた場合もあったのならば、先程例としてあげた三条天皇が当子内親王を齋宮として伊勢へと送ったことに対しても合点がいく。ここでは、純粹に合否を決める卜定によってというわけではなく、卜定によって齋宮に選ばれるという形式が必要だったのであろう。この卜定で齋宮に選ばれるということは、天照大神の御意向により、齋宮に望まれたということになる。その天照大神の御意向によって選ばれた齋宮を伊勢へと送り、天皇家との架け橋となることこそが齋宮という役割の本質だと思われる。第二節でも論じたように齋宮が、伊勢に「居る」ことに齋宮制度の意味があるとすれば、彼女達の存在は神に奉仕する「巫女」というよりも天皇家と祖先神である天照大神とを繋ぐ架け橋でもあり、その威光を媒介して受け取り、天皇へともたらず「切り札」と言えるのではないだろうか。

### 第三章 和歌からみる齋宮の実像と考察

#### 第一節 雅子内親王と敦忠の和歌からみる考察

この章では、齋宮とその周辺が詠んだ和歌を題材にして、齋宮の内面とその和歌が詠まれた背景を考察していく上で、平安時代における和歌とはどのようなものだったのかについて触れておきたい。平安時代における和歌は私的な和歌と公的な和歌に分けられる。私的な和歌とは、個人が自分の思いを表現したもので、公的な和歌とは宮廷の行事で作られたものである。<sup>(48)</sup>しかし、次第に和歌よりも漢詩文の方が価値が高いたものとみなされるようになり、漢詩文が公式なもの、和歌は私的なものと区別されていったのである。<sup>(49)</sup>

また、本章を論じるにあたって、所京子氏の『齋王和歌文学の史的研究』<sup>(50)</sup>と『齋王の歴史と文学』<sup>(51)</sup>を研究の参考としている。所京子氏は

いう遠地で潔斎と神に祈りながら耐え忍ぶ生活を送っていたのかもしれないが、第一章で取り上げた斎宮の館で行われていた行事は、宮中で行われている行事と同じ内容のものが行われていることが分かる。また、都からの使者が頻繁に訪れており、斎宮のために歌合なども多く行われていたことから、意外と豊かに生活していたことも想像できる。

小林茂文氏は、国家祭祀として斎宮制度を確立させたことは女性の栄光ではなく精神の敗北だと断言しているが、私自身は必ずしもそうではないと考えている。<sup>(35)</sup>確かに「斎宮」に選ばれるという事は人として、女性としての意味の一種の喪失とも捉えられる。一度、斎宮という役目になってしまえば、簡単に辞退することは出来ない上に、斎宮の役目が終わった後も特別な存在として居続けることになるからだ。

斎宮が女性としての意味を喪失する理由として三つの事が挙げられる。一つには、皇女という身分は元々結婚しないのが当然だという考え方が当時存在していた。<sup>(36)</sup>しかも、結婚するとすると、その身分に釣り合うのは皇族しかない。<sup>(37)</sup>例えば、第三章で取り上げるが、斎宮として役目を果たして帰京したあとに村上天皇の女御となった徽子女王が有名である。徽子女王はその後、親子内親王を生み、彼女が斎宮として選ばれたため、一緒に再び伊勢の地へと赴いている。二つには、臣下に降嫁するのは憚れていたという外聞もあった。<sup>(38)</sup>降嫁する場合はそれ相応の身分でなければならず、臣下といつてもやはり左右大臣に関する者ばかりであった。降嫁している例として、稚子内親王が藤原師輔に、罇子女王が藤原教通の室となっており、どちらも時の権力者の息子であった。さらに、斎宮の役目を終えたとしても、結婚適齢期が過ぎてしまっている場合があり、出産などの負担を考えると高齢になってからの結婚は難しかったのだと考えられる。<sup>(39)</sup>また、斎宮の任期中の精進潔斎、男性の接触不可という生活が、退下後も続けなければならない場合もあることから、死ぬまで独り身を貫いた斎宮も多く、出家した者もいる。

だがやはり、斎宮が伊勢神宮で奉仕しなければならない理由には政治的な意味も存在すると考えられる。その例として挙げられるのは当子内親王である。三条天皇の娘である彼女は父が天皇へと即位したと同時に伊勢へと下っている。彼女は三条天皇から最も寵愛を受けている娘で

あった。この時期、天皇よりも権力が強かったのは藤原道長で、彼は三条天皇を退位させて、<sup>(40)</sup>自分の娘である中宮彰子が産んだ皇子を天皇にしようと目論んでいた背景があったことから、三条天皇は天皇としての権力を取り戻し、威を現すためにも、最愛の娘を斎宮として送ったのである。

また、倉塚暉子氏は日本の国家権力が天皇に統合されていなかった古代では、基本的にヒメとミコと呼ばれる男女一対の宗教的権力者が霊力と政治力をもつにすることで各氏族を統治していたと論じている。<sup>(41)</sup>だが、豪族の中から天皇家という大きな権力が生まれ、一人の権力者（天皇）へと集約していった事で、呪術的な力での統合が必要なくなったヒメは天皇家の祖先神を祀るためだけに伊勢へ追い払われた存在であると述べている。<sup>(42)</sup>

その一方で上野千鶴子氏は未婚の皇女が「カミという象徴的な絶対的至高者」と「神妻かみつま」として結ばれたことで、天皇と神をつなぐ通路の役割となった斎宮は、天皇に新たな宗教的権力を与えるための存在である論じている。<sup>(43)</sup>倉塚氏の論じる古代の女性の存在が、兄弟を守護する霊力的存在として確立してきたという、この枠に斎宮を当てはめるのなら、「斎宮」という存在は自身の近親者のために、斎宮に選ばれた者達の意思に関係なく、「斎宮」という役割を課せられたということになってしまふ。それに加えて前節で論じた「物忌」という存在があるならば、祭祀を滞りなく行う分には斎宮としての必要性はほとんど無くなるのではと考えられる。

つまり、斎宮は国家神である天照大神が天皇家の守護神であるという事を世に知らしめる存在として、伊勢に滞在しなければならず、斎宮は政治権力者としての天皇の背後で、天照大神の威光を媒介し、それを世に示すために国家的巫女の役割も受け持っていたのである。このように他の巫女とは違う斎宮という存在の特殊性は天皇に直接関わる女性であるからであり、神と天皇の血を受け継ぐ未婚の内親王が「伊勢」という国家的神が住まう場所に「居る」事に大きな意味があったのである。<sup>(44)</sup>

### 第三節 斎宮とは何か

ついで考察しつつ、その本質について論じていく。

## 第二章 斎宮制度の内面と本質

### 第二節 伊勢の祭祀における物忌の役割

この章では、斎宮の役割と政治的部分から、斎宮の必要性について考察していきたいと思う。まず、伊勢神宮での日常的な神事を担っていた「物忌」と呼ばれる童女たち（一部童男）を取り上げつつ、斎宮の役割の意味と重要性について論じていく。国史大辞典によると項目名「物忌」には、伊勢神宮をはじめ賀茂・春日・平野・松尾・香取・鹿島などの大社に仕えた童女・童男のことを物忌と称する、と記載されている。<sup>(26)</sup>伊勢神宮での日常的祭祀は在地の豪族の男女よりなる專業神職者たちによって行われており、斎宮はその役割の上に覆いかぶせられるように存在している。<sup>(27)</sup>つまり斎宮の代理として物忌が置かれたのではなく、物忌の名前の上に斎宮が乗った形となっている。<sup>(28)</sup>

つまり、主な伊勢神宮の祭祀は斎宮ではなく、実質的には物忌と彼女たちを補助する物忌父を中心とした男女神職者たちによって担われていた。<sup>(29)</sup>『延喜式』によれば、延暦二十三年の段階で内宮には禰宜以下計四十三人の專業神職者があり、中には童男の場合もあるが、外宮の物忌達は全て童女であった。物忌父は後見役の一族男性で、後世では肉親とは限らないが、実際の父が物忌の補佐役となっている事が多かった。<sup>(30)</sup>その一方で、実際には成人女性も神事に関与しており、生業に関わる日常的な働きを行っていたが、伊勢神宮の正規の女性神職者は物忌とされている。<sup>(31)</sup>また、普段の伊勢神宮での日常的祭祀は分担されたそれぞれの役割によって、儀式が行われていたが、斎宮が担う役割のものはここにはない。

『延喜式』の「伊勢大神宮」には、物忌が関与する祭祀として次のような記載がある。毎日、朝夕大御饗に御饗を供奉することを最大の職責としつつ、その他にも祈年祭、二回の月次祭、神嘗祭、山口神の祭、正殿の心柱を採る祭、宮地を鎮め祭る、船代を造る祭、度会宮の祭祀などにおいて、「大物忌」「物忌」が祭祀を行う中で役目があると書かれてお

り、その中で斎宮が担当する役割があるのは、二回の月次祭と神嘗祭だけである。その他の行事は全て伊勢神宮の内外宮での祭祀である。

八〇四年（延暦二十三）に書かれた『皇大神宮儀式帳』<sup>こうたいじんぐうぎしきちやう</sup>には、斎宮を示す「斎内親王」については儀式帳の中では部分的にしか出てこない。<sup>(32)</sup>つまり、ほとんどの儀式と行事は伊勢神宮の神官や物忌達によって行われており、彼・彼女らが伊勢神宮での神事を支えているのである。<sup>(33)</sup>第一章の第三節でも述べたように、『延喜式』の「斎宮」では「斎内親王」として記載されているが、日常的に行われている祭祀には斎宮は関わっておらず、斎宮が卜定されて伊勢に下るまでの祭事や行事も斎宮寮の者や神官達など斎宮の身の回りに居る者達によって取り仕切られているため、斎宮自身が主として祭祀や行事を行う事はほとんどなかった。

また、なぜ成人女性ではなく、童女が物忌として伊勢神宮で奉仕しているのか。それには先ほど述べたように男女によって祭祀を担わなければならないからだ。『延喜式』には「物忌父死なば其の子は解任。子死なば父も亦解任。」とあり、物忌父と「子」はどちらが死んでも、もう一方は解任されると記載されている。ここで見られるのは死の観念ではなく、物忌の「子」と「父」の一体性であることから、「子」の存在の重大性に規定されている。<sup>(34)</sup>

### 第二節 天皇家と伊勢神宮の関係からみる斎宮の役割

前節では、伊勢神宮での日常的祭祀を行っていた物忌の役割について論じたが、この節では斎宮制度期の天皇家と伊勢神宮の関係について論じつつ、斎宮の存在の必要性について考察を進めていきたいと思う。第一章で述べたように、斎宮は天皇の代わりに、御杖代として天照大神に奉仕しなければならないという役目が課せられていた。この斎宮という役割が最も際立つのは、年に三度の三節祭の際に伊勢神宮に赴き、玉串を神前に奉納する時であるが、その祭祀を除けばほとんど斎宮が活躍する機会はなく、普段は伊勢神宮の近くの斎宮の館で過ごしていた。

斎宮として選ばれた者の中には、幼い頃に家族と別れて、人生のほとんどを伊勢神宮の神に仕えることに費やした者もいる。確かに、伊勢と

表2 齋宮の食事

調味料	酒・酢・醬・塩
飯	ご飯
生もの、焼き物	鱧膾（スズキの刺身）、鯉膾（コイの刺身）、鯛膾（タイの刺身）、汁膾（汁で湯通した魚）、寒汁鯉味噌（味噌の鯉の煮ごり）、鰻熱汁（アワビが具のスープ）、零余子焼（切り身を竹串に刺して焼いたもの）、鯛の平焼（タイの焼き物の切り身）、棠螺の焼き物（サザエを切り身にして串に刺して焼いたもの）
干物の類	蒸鰻、干鳥（キジの干物）、焼烏賊、楚割（魚肉を細く切って干したもの）
菓子類	まくわうり、小柑子（みかん）、すもも、桃、蓮の実、栗、マガリ（唐菓子）、ブト（唐菓子）
塩辛や和え物	鯛醬（タイの塩辛）、ところてん、カキの塩辛、鰻腸漬（アワビの塩辛）
その他の食材	穀物……稲・粟・麦・きび・胡麻 魚……鰹・鮎・鯛・サメ・鯖 肉……猪の肉・鹿の肉 海産物……海苔・イガイ・ミル・ワカメ 野菜……マメ・ウリ・ナス・大根・蕪 その他……屠蘇

その代用品として雉の肉が使われており、肉の料理は生肉ではなく一度乾燥させてから料理として使われていた。同じく『延喜式』の「齋宮」の「食法」には初齋院・野宮で官人に支給される食料について記載されているが、そこに「鳥の腊」はない。他にも祭祀や行事の際に料物として記載されているものの中に「鳥の腊」と記されているものはなく、ほとんどが「腊」と表記された料物として記載されているだけである。これが鳥なのか魚の丸干しのことを指しているかは分からないが、どの料物にも入っていることから、重要な物として料理に使われていたので

はないだろうか。

齋宮の役目から伊勢へと下向するまで、そして下向したあとの生活について、年間行事と食という側面から見てきたが第一節と第二節から、齋宮という役割は常に身を清めているように想像できるが、実際は厳しい精進齋の毎日を送っているというわけではなく、食事の面にしても、必ずしも寺のように精進料理ばかりを食べなければならなかったというわけではなかった。また、生活面でも年中行事は宮中で催されているものと同じものが行われており、彼女たちは伊勢においてただ静かに過ごしていたわけではなかったのではないだろうか。

『延喜式』には齋宮寮の官人の人数が記されており、初齋院だけでも齋宮に仕えた官人が八十人おり、野宮では更に増えて一四五人、伊勢の齋宮寮の官人は五百二十人おり、地方に置かれる都の官人の人数としては少なくはなかった。しかも、齋宮に直接仕える女房も居た事から、人数としては更に多

いものだったと思われる。齋宮の周りに人が少なかった事は考えられにくく、決して苦を強いられた生活ではなかったと考えられる。齋宮が日常生活を過ごす上で和歌を詠んでいるが、そこから彼女たちの内面を考察するのは第三章で取り上げていきたい。次章ではなぜ、齋宮という役割の制度が出来たのかに



図1

送っている事が、この節と後述する第三章での和歌の分析から読み取ることができた。まずは齋宮の一年間の行事について挙げていく。表1は齋宮がかかわっている年中行事について、虎尾俊哉氏が編集した『延喜式・上』<sup>(23)</sup>に記載されているものに、宮中での行事と比較するために二つの記号を入れたものである。

この表の中で、宮中で行われている行事を挙げると、六・九・十二月の伊勢神宮に関する行事である月次祭、神嘗祭、新嘗祭の他に同じ節会や祭祀が行われていることが分かった。表に(同)と記したものが宮中で行われているものと同じ行事である。その中で、直接齋宮が関わっている行事については(齋)と記す。つまり(同)は宮中で行われている行事や祭祀を齋宮寮の官人が主体となっていて行っているものである。その中で、(齋)が付いていないものは齋宮が直接関わっているものではなく、官人達が全て取り仕切っていた祭祀である。

一方で(齋)の行事は、齋宮が関わっているものであるが、祭祀などは自らを取り仕切っていたわけではなく、祭祀の重要な役目として参加するという形であった。節会などはただ、宮中と同じものを行っている、というわけではなく伊勢という遠地にいる齋宮の心を慰めるための行事でもあったのだろう。また、行事だけではなく、第三章で論じるように、齋宮に仕えている女房や齋宮寮の官人達が齋宮のために、歌合せや貝合わせなども催しており、決して必要な行事を行っている、というだけではなかった。

この年間行事の中で毎月行っているものとして、「大神宮遙拝」というものがあるが、これは齋宮の館から伊勢神宮の方に向かい、拜むというものであり、毎月の朔日に伊勢神宮へ赴いているわけではない。他の節会や祭祀も齋宮の館で行われていることから、伊勢神宮での祭祀は先ほど述べたように年に三回だけである。三節祭と呼ばれる二回の月次祭と神嘗祭はもちろん、伊勢神宮だけではなく、宮中で行われる行事としても重要である。月次祭は齋宮の年間行事の表にも六月と十二月にあるが、宮中では祭祀を司る神祇官が国家安泰と天皇の長寿を祈るもので、神嘗祭も五穀豊穡を感謝するための大祭である。このように、伊勢でも宮中でも同じ祭祀が行われていることから、行事や祭祀の違いは殆どな

く、齋宮が直接関係する伊勢神宮への奉仕を除けば、宮中での行事や祭祀と変わりないことが分かる。

次に「食」についてである。お正月の「御菌固」の行事の際には、固い物を食べる習わしだが、『延喜式』には正月の節会の際に齋宮が食べるものとして、次のように記されている。

#### 正月の三節の料

東鯁・堅魚・隠岐の鯁・煮堅魚・鳥の腊・鳥賊・鯛の楚割各三斤、楚割の鮭三隻、鮭三隻、薄鯁・熬海鼠各二斤、紫菜・海藻各一斤、塩三升、醬・味噌・酢各一升五合、酢六斗、糯米九升、大豆・小豆・粟・黍各三升、小麦・胡麻・生栗子各六升、糯三升、干柿三連、搗栗子三升(已上は供料)、米二石、糯米一石、大豆二斗、小豆三斗、油一斗、雑の腊・鮪各三斗、鯁・堅魚各二十斤、酒一石(已上は官人以下の料)、調布十三端三丈六尺(膳部四人、水部・酒部・炊部・殿部各三人、掃部二人に、別に衫の料二丈、袴・襷の料八尺、女孺三人に襷の料各四尺、仕丁一人に袴・襷の料八尺)。<sup>(24)</sup>

この「供料」というのは、齋宮の食料という意味でその中に「鳥の腊」というものがある。これは鳥の肉を干した物のことで、肉であることは確かである。御菌固と呼ばれる行事は硬いものを食べることで一年が健康であることを祈るものである。史料には、硬いものとして栗などの他に乾燥させたものが入っていることが分かることから、この「鳥の腊」も硬いものとして食べられたのではないだろうか。鳥の干し肉などを食べていることから、決して精進料理というわけではなかった。しかも、伊勢は山と海に面している土地であるため、食材が豊富で、料理の種類も多く新鮮な物を使った料理もだされることが読み取れる。表2は齋宮の食事として出されていた料理の献立をまとめたものである。そこには豊富な魚料理と一緒に鳥・猪・鹿の肉が調理されていたことが記されている。

また、「類聚雑要抄函卷」<sup>(25)</sup>にも平安時代当時の「御菌固」の料理の献立が載っており、そこには「猪六」「鹿六」と表記されている。また、

表1 齋宮年間行事

月日	行事
正月元旦	齋王大神宮遥拝、寮頭以下齋王に拝賀（齋） 元旦の節会、供屠蘇酒、御歯固（同）（齋）
三日	大神宮司以下齋王に拝賀（齋）
七日	白馬の節会（同）（齋）
初卯日	卯杖（同）
十六日	踏歌の節会（同）
二月四日	祈年祭（同）（齋） 諸司の春祭（同）
五月五日	端午の節会（同）
晦日	齋王多気川で禊（齋）
六月十一日	外宮諸社祝齋宮に参ず（齋）
十五日	齋王離宮院へ赴く、大祓（齋）
十六日	齋王度会宮月次祭に奉仕（齋）
十七日	齋王大神宮月次祭に奉仕（齋）
十八日	齋王齋宮に還る（齋）
晦日	鎮火祭（同）道饗祭（同）大殿祭（同）御贖（同）（齋） 大祓（同）
七月二十五日	相撲の節会（同）
八月	諸司の秋祭（同）
晦日	齋王尾野湊で禊（齋）
九月九日	重陽の節会（同）
十五日	齋王離宮院へ赴く、大祓（齋）
十六日	齋王度会宮神嘗祭に奉仕（齋）
十七日	齋王大神宮神嘗祭に奉仕（齋）
十八日	齋王齋宮に還る（齋）
十月晦日	齋王尾野湊で祓（齋）
十一月中卯日	新嘗祭（同）
中辰日	新嘗祭直会、大神宮司以下参仕（齋）
晦日	齋王多気川で禊（齋）
十二月十五日	齋王離宮院へ赴く、大祓（齋）
十六日	齋王度会宮月次祭に奉仕（齋）
十七日	齋王大神宮月次祭に奉仕（齋）
十八日	齋王齋宮に還る、二所大神宮へ供幣（齋）
晦日	鎮火祭、道饗祭、大殿祭、御贖、大祓（同）
各月朔日	大神宮遥拝（六・九・十二月は除く）（齋） 忌火・ 庭火祭（同）
晦日	卜庭神祭、解除（六・十二月は除く）（同）（齋）

また、到着後は「齋宮御所」と呼ばれる現在の三重県明和町にあった齋宮に留まり、伊勢神宮で行われる三節祭とよばれる六月・十二月の月次祭と十月の神嘗祭以外はこの場所で日々を過ごしていた。

### 第三節 延喜式からみる齋宮

この節では「延喜式」から、二つの点について考察していきたい。まず一つ目は「年間行事」である。伊勢の地と宮中での生活を比較しつつ、伊勢で行われる行事が宮中と異なっている部分はあるのか、または同じ行事が行われていたのかをまとめ、齋宮が普段はどのように過ごしてい

たのかについてまとめていきたい。もう一つは「食」についてである。寺などでは四肢のあるものを食らうことは禁じられていたが、齋宮という役目を持った者、または周りの者達も常日頃から僧侶と同じように食事に制限がかけられていたのかについて考察し、論じていきたいと思う。

一つ目の「年間行事」についてだが、齋宮の主な役割は一節で述べたように、二回の月次祭と神嘗祭の際に、伊勢神宮の内宮と外宮の瑞垣御門の前の西側に榊の枝に麻の繊維が付けられた太玉串を立てて奉納することである。それ以外は、伊勢神宮に近い現在の三重県明和町に建てられていた齋宮の館で過ごしていた。生活としては、常に精進齋をしてい

子内親王が文永九年（一二七二）二月に退下すると、その後齋宮の発向はかなわず、元弘三年（一二三三）十二月の後醍醐天皇の祥子内親王の卜定を最後に齋王制度は廃絶することとなる。<sup>(10)</sup> それまでに卜定された齋宮の最年少は二歳（高倉天皇の功子内親王）で、最年長は三十歳（後堀川天皇の利子内親王）であった。<sup>(11)</sup>

## 第二節 卜定から伊勢下向まで

この節では齋宮が卜定で選ばれてから伊勢へと群行するまでの一連の動向を追って説明していく。前節で記述した通り齋宮は卜定、つまり占いによって選ばれる。「延喜式卷第五 神祇五 齋宮」には次のように記されている。<sup>(12)</sup>

凡天皇即位者、定伊勢大神宮齋王、仍簡内親王未嫁者卜之、若無内親王者、依世次、簡定女王卜之

つまり、天皇が即位したならば、まだ嫁いでいない内親王もしくは女王の中から、伊勢神宮の齋王を選んで占え、と書かれている。この時、卜定と呼ばれる占いは天皇の即位後もしくは数ヶ月以内の卜定が通例とされており、陰陽寮が卜定を行う日時を勘申することからはじまるが、この占いは先に内親王を指定してから、齋王にふさわしいか吉凶を占うものだった。<sup>(13)</sup> 卜定で決定したあとは勅使が齋王に選ばれた内親王がいる家へとそのことを知らせに行くきまりである。<sup>(14)</sup>

しかし、卜定前に齋王が決定されているものもあれば、「吉」が出るまで数度に渡る卜定や、複数の候補者がいて当日卜定するまで決まっていないうものもあった。<sup>(15)</sup> 第三節ではこの卜定による齋宮の決定について更に詳しく論じていく。その後は陰陽寮の占いによって選ばれた初齋院へと移り潔斎生活を送ることとなる。選ばれる場所はそれぞれだが、いずれも大内裏の東に位置する場所が選ばれており、この際には、後に記載している野宮に入る前と同じく鴨川で禊を行なわなければならないが、<sup>(16)</sup> 初齋院へ入る時期としては、年末に近い場合だと翌年になるが、八月・九月の初齋院入りが原則であり、潔斎期間として一年間とされて

いるが、二十三日の期間しか入っていないなかった内親王もいた。<sup>(17)</sup> 初齋院で仕えていた官人は、男官別当五位一人以下三一人、女官は別当五位一人以下二二人、戸座・火炬小子三人、今良・仕丁など二四人の計八十人であった。<sup>(18)</sup> その後、野宮に移る際には官人の数は男官が二四人、女官が二九人、雑色が二人増えて、男官が五五人、女官が五一人、雑色三九人の計一四五人となり、初齋院から野宮の官人に移行した者が多かった。<sup>(19)</sup> 大内裏の外の清い土地に作られた野宮には齋殿、寢殿、出居殿を中心として、その他に諸司雑舎があり、小柴垣で囲まれ、黒木の鳥居がシンボルであった。この場所は一年間の飯の宮であったが、官人が一四五人いたので、相当の広さを持つていたことが分かる。

潔斎を終えた齋宮は伊勢へと旅立つ前に、葛野川で禊を済ませてから「発遣の儀」として天皇に会う儀式を行う。この儀式は内裏の八省院で行われ、天皇が齋宮の額髪に御櫛を挿し「京乃方仁赴支給不奈」と言葉かけられるもので、挿された御櫛は勢多頓宮まで額髪に挿したままで、この頓宮で管に納められた。<sup>(20)</sup> 群行が発発すると、齋宮は「総花輦」と呼ばれる輿に乗り、官人達によって連なる長い行列を作って移動する。途中で宿泊所となる頓宮は勢多、甲賀、垂水、鈴鹿、壹志に造られており、そこに至る途中で御禊を行わなければならないかった。「六処の堺の川」とされたのは山城国の白川と近江国の勢多川・甲賀川、伊勢国の鈴鹿川・下樋小川・多気川の六つの川で御禊が行われた。<sup>(21)</sup> 群行の行程は五泊六日とされており、以下のようにして伊勢まで進められていた。<sup>(22)</sup>

- 一日目 京↓白河（禊）↓山科↓会坂（禊）↓勢多川（禊）↓近江国府
- 二日目 近江国府↓井水（禊）↓甲賀川（禊）↓甲賀頓宮
- 三日目 甲賀頓宮↓垂水頓宮
- 四日目 垂水頓宮↓山口↓鈴鹿峠（禊）↓鈴鹿頓宮
- 五日目 鈴鹿頓宮↓鈴鹿川（禊）↓安濃川三瀬↓藤方（津）↓雲出川↓壹志頓宮
- 六日目 壹志頓宮↓六軒↓下樋小川（禊）↓櫛田川↓多気川（禊）↓伊勢神宮



がら、考察を進めていきたい。

第一章では、齋宮が卜定によってその役目選ばれてから、伊勢へと下り、日常をどのように過ごしていたのかについてとりあげていく。また、史料として『延喜式』を使用することで、伊勢神宮以外での祭祀や行事をとりあげながら齋宮をみていきたい。

第二章は、齋宮の存在の必要性について論じている。齋宮が伊勢の齋王宮から神宮へと赴くのは年に三度だけで、それ以外の伊勢神宮における祭祀には関与していなかった。伊勢神宮の日常的祭祀を担っていたのは「物忌」と呼ばれる存在で、物忌がいるにも関わらず、齋宮の存在の必要性はあるのか、という疑問に対して先行研究をとりあげながら論じていきたい。義江明子氏の「物忌童女と〈母親〉」<sup>(2)</sup>では、第一節でとりあげる「物忌」と呼ばれる童女（一部童男）が、伊勢神宮で日常的な祭祀を担っていたことに対して、齋宮を古代の巫女としての典型例で見るとはなく、日常的祭祀を行っていた物忌に焦点を置くことで、齋宮の特殊性を論じている。<sup>(3)</sup>また義江氏は、「歴史学における〈妹の力〉」<sup>(4)</sup>では、古代の女性史の中では、女性の霊能力は女性の社会的地位を確立してきたという考え方について疑問を持った上で、小林茂文氏の〈妹の力〉論をとりあげている。田中貴子氏は「齋宮の変貌―〈聖〉と〈性〉のはざままで」<sup>(5)</sup>において、伊勢神宮で奉仕するという神聖な役目を担った「齋宮」を持つ、女性の聖なる力とは何か、という疑問について考察した上で、最高の巫女である齋宮が自らの性を媒介にして、どのような過程でその「聖」性が付与され、聖なる力を得た聖女へとなるのかが論じられている。この三つの論文の考察をとりあげつつ、齋宮の存在の意義とは何だったのか、齋宮とは何かについて論じていきたいと思う。

第三章では、齋宮の内面について考察していきたい。齋宮に選ばれた者達は、選ばれた事に対してどのように感じていたのか、彼女達が残した和歌を史料としてとりあげること、齋宮としての内面だけではなく、一人のひととしての内面も読み深めていく。とりあげた和歌は所京子氏の研究書である『齋王和歌文学の史的探究』<sup>(6)</sup>と『齋王の歴史と文学』<sup>(7)</sup>に記載されている齋宮とその関係者が詠んだものから抜粋した。特に第一節では「稚子内親王」と「藤原敦忠」の和歌のやりとりをみながら、

和歌の詠まれた背景を考察しつつ、なぜ齋宮である稚子内親王とやりとりする事が出来たのかについて考察を展開していきたい。第二節では齋宮の周辺の人々が齋宮に対してどのような思いを持って接していたのかを読み取るために、天皇や親類の和歌をとりあげる。第三節では、齋宮を務めた者達がどのような感情を和歌として残しているのか、考察を進めていきたい。この三つの章をもって、外側と内側から齋宮という存在の本質についてせまっていこうと思う。

## 第一章 史料のなかの齋宮

### 第一節 齋宮の役割

この章では、最初に「齋宮」とはどのような存在であったのかについてまとめていこうと思う。第一節では齋宮の役割についてまとめ、第二節では齋宮が卜定によってその役目選ばれ、伊勢へと下向するまでを順を追ってみていきたい。第三節では平安時代に完成された法令集である『延喜式』<sup>(8)</sup>を史料として用いて、齋宮の行事と食について考察していこうと思う。

まず、齋宮とは卜定によって選ばれた、未婚の皇女や女王の事で、天皇の代わりとして伊勢神宮の天照大神に奉仕する役目を背負っていた。天皇の即位後に卜定で選ばれた齋宮は初齋院・野宮で潔齋生活を送った後、三年目の九月に群行によって伊勢へと入り、その後は天皇の讓位・崩御、肉親の喪、本人の事故に遭うまで、伊勢で潔齋と神宮での祭祀に奉仕する生活を送っていた。齋宮は三節祭である六月・十二月の月次祭と九月の神嘗祭で、伊勢神宮の内宮と外宮の瑞垣御門の前の西側に榊の枝に麻の織維が付けられた太玉串を立てて奉納することが第一の務めとされていた。起源としては複数の説があるが、史料上の確実な齋宮は大来皇女で、のちの聖武天皇の時代に齋王制度が確立した。奈良時代末の光仁天皇以降は歴代天皇の即位後に齋宮が卜定され、潔齋の後

に伊勢に赴くようになる。<sup>(9)</sup>

しかし、平安時代末期になるとその原則は崩れていき、龜山天皇の愷

# 伊勢齋宮の役割と内面に関する考察

井上 亜友美

(鍛冶ゼミ)

## 【目次】

はじめに

第一章 史料のなかの齋宮

第一節 齋宮の役割

第二節 卜定から伊勢下向まで

第三節 延喜式からみる齋宮

第二章 齋宮制度の内面と本質

第一節 伊勢の祭祀における物忌の役割

第二節 天皇家と伊勢神宮の関係からみる齋宮の役割

第三節 齋宮とは何か

第三章 和歌からみる齋宮の実像と考察

第一節 稚子内親王と敦忠の和歌からみる考察

第二節 齋宮周辺の和歌からみる寵愛とその重要性

第三節 和歌から齋宮の心情を探る

おわりに

## はじめに

伊勢神宮を知っている人は多いかもしれないが、「齋宮さいくう」という存在が高校までに習う歴史に登場することはほとんどない。私自身、京都市右京区にある野宮神社に行くまで、「齋宮」もしくは「齋王」という言葉さえも知らなかった。

伊勢神宮の内宮には天照大御神、外宮には豊受大御神が祀られており、その歴史は遙か古代まで遡るほどで、今も信仰の対象となっており、参拝者は絶えることはない。これから考察し、論じていく「齋宮」とは、伊勢神宮で奉仕するという役目を担った内親王や女王への呼び方で、「齋内親王さいないしんのう」、「齋王さいおう」とも呼ばれ、賀茂の「齋院さいいん」と区別される際には「齋宮」と呼ばれる。本稿では、「齋宮」の呼び方で統一することにその歴史としては長く、史料上では飛鳥時代の大来皇女がはじまりとされ、南北朝時代の祥子内親王まで続く歴史を持つ。

私が特に興味を持ったのは、彼女たちの役割の特殊性と、齋宮を勤める彼女たちの心情に対してである。なぜ、彼女たちは伊勢神宮で奉仕しなければならなかったのか、なぜ彼女たちでなければならなかったのか。本稿ではそれに対して疑問を持ち、齋宮という存在が国家祭祀機構の中で果たす役割としての「外側」と、役割を担う一人の人間の心情としての「内側」に着目することで、その両面から齋宮という役割の性質とその意味について明らかにしていくことを課題とする。基礎的な役割を知るにはまず『延喜式』<sup>①</sup>の「齋宮」の項目を史料として使用し、齋宮の内側を理解するために齋宮や周辺の者達が詠んだ『和歌』を題材にしな